

郵政博物館誕生 115 年記念 錦絵—東京浪漫展

郵政博物館（押上・東京スカイツリータウン・ソラマチ9階）

前期 2017.09.16～10.24

後期 2017.10.26～11.26



「郵政博物館」は、今年で115年を迎えることを記念して、“文明開化の東京等の名所を描いた当館収蔵の「錦絵」”を展示し、当時の観光名所や風物を懐古する記念企画展を開催している。

（前期と後期で展示品の入れ替えあり）

歌川広重（三代）《東京名所 両国報知社図》（上図）

1868年、王政復古の号令により江戸幕府が廃止となり、明治新政府が発足し、以降、日本は欧米に並ぶ近代国家への道を歩み始める。この文明開化により、都心を中心に欧米の新しい文化・文物が積極的に取り入れられると、街の様子や人々の生活にも大きな変化が訪れ、東京は江戸の風情を残しつつ西洋の建築や文化を採り入れた美しい都として大きく発展していった。

「錦絵」は、江戸時代に技術が確立された“多色刷の浮世絵”で、絵画作者、彫り師、摺り師が互いに力を合わせて役者絵や美人画を描いて人気を博した。

本展では、なかでも文明開化の東京や風物を描き、庶民の注目を集めた「開化展」として、開化絵の第一人者である三代目「歌川広重」の作品を中心に紹介している。展示品の多くは、丁度西洋から赤色の染料が入ったために、空が鮮やかな赤色で描かれて、近代化を象徴する開化絵らしいことが特徴である。

三代目歌川広重 《東京名所 三ツ井ハウスノ図 する賀町》(1874年・明治7年)



現在の日本橋室町にあった両替商・三井組（後の旧三井銀行）の洋風建築を中心に、右隣に日本建築の越後屋呉服店（現三越本店）、左側には江戸城超しに富士山と、江戸の風情を残しながら西洋文化が根づいていった様子が描かれている。